

連載 私の町はどんな町⑭

川越市(二)

江戸の文化をうけた「小江戸」川越は、大正十一年県内初の市制施行で川越市になりました。

中心部の『蔵造りの町並み』は、平成十一年に国重要伝統的建造物群保存地区に指定されています。札の辻近くにある大沢家住宅(国重文)が、明治二十六年の川越大火の時も焼け残ったのをきっかけにこの地域に蔵造り住宅が続々と造られるようになったのです。

『川越城』は、室町時代の一四五七年に扇谷上杉持朝の命により太田道真・道灌父子によって築かれました。道灌にまつわる有名な説話、「七重八重花は咲けども山吹の、実の一つだになきぞ悲しき」の話は、川越市の「市の花」は山吹なので、川越周辺の出来事だと云われています。

又川越は関東地方でのお茶栽培の発祥地とされています。

河越の無量寿寺(後の喜多院・中院)の創建に当たり八三〇年最澄の高弟円仁が寺に茶園を造り、茶の栽培を始めたのが『河越茶』の基で、河越茶は狭山地方まで広がって一八〇〇年頃狭山村の有力者が江戸の「山本山」と提携して河越茶は『狭山茶』として現在の地位を築いたと云われています。

一八五三年アメリカのペリーが軍艦四隻をひきいて開国を迫った頃の狂歌に――

太平の眠りをさます上喜撰(蒸気船) たった四杯(四隻)で夜も眠れず

という歌があります。これは狭山銘茶の「上喜撰」を飲み過ぎて眠れない。こと、ペリー来航の騒ぎで夜も眠れない有様を詠まれたものとされています。

川越の特筆すべき開発事業に、新河岸川開発があります。一六三八年、川越の大火で仙波の東照宮が焼失し、その再建資材を江戸から運ぶため「知恵伊豆」こと藩主の松平信綱が一六四七年に仙波の

扇河岸を開き、荒川に沿って南下する船運を開始しました。当時は、朝霞市の下内間木付近で荒川に合流していましたが、後にもっと南下し東京都北区の岩淵水門の少し下流で隅田川に注いでいます。全長は約二五、七キロです。

船運の全盛期は、文化年間から明治中期迄で、大正三年に沿岸の船積問屋達が株主となり、新河岸川に並行して、『東上鉄道』(現在の東武東上線)が出来て船運の役割に終止符をうちました。

船は帆かけの高瀬舟が中心で、並船・早船・急船・飛切り船の四種合計八十二艘があり、

- 並船は荷物だけの不定期船で箱崎町、両国、浅草花川戸の各問屋へ廻ります。
- 早船は四〜五日おきに往復し旅客と急ぐ荷物で、前日の午後四時頃川越を出発し、翌朝九時頃千住へ、正午頃浅草花川戸に着きました。
- 急船は不定期便。
- 飛切り船は新鮮魚介類を運ぶ超特急便。

ちなみに早船の旅客運賃は十五銭で、当時米一升が六銭だったので、かなりの高額でした。利用客は商家の旦那衆で千住や浅草の花街へ遊びに行くのが多かったです。

今も残る「川越舟唄」に当時の船運の様子が伺えます。

♪九十九曲り仇では越せぬ
遠い水路の三十里

♪押せよ押せ押せ二桝櫓で押せよ
押せば千住が近くなる

♪千住女郎衆は錨か網か
今朝も二はいの船止めた

♪千住女郎衆は七色きつね
おらも二三度だまされた

♪戸田の渡しで今朝見た島田
島田見るたび思い出す

♪家へ帰れば女房や子供
ちゃんよだつこと

かじりつく

(小島 次郎)

ISO9001・14001に裏づけされた高品質な
工事と誠実なアフターケア環境にやさしい
リニューアルを提供します。

本社 川崎市川崎区大川町8-1

TEL 044-366-4807(営業部)

FAX 044-366-4810

URL <http://www.sinyo.com>



ビル・マンション等のリニューアルはシンヨーにお任せ下さい。

シンヨー株式会社